



篤志小文

全

中村俊定文庫
文庫 18
159



笈之小文序

風羅坊芭蕉菴排青之同くハ
今此乃法達人なり其門葉日々
茂り月々々々盛なり門葉推々
翁や耳ハ比芭蕉翁ありて
知れり是は戸深川の庵室子因
翁也此はつうけ芭蕉と積
多り故にハ此翁上より



そのれ^女の時^女す^女これ^女記と集^女
これ^女なる^女を^女て^女後^女の^女こ^女こ^女と^女
積^女へ^女漸^女法^女翰^女と^女を^女る^女 彦^女夜^女子^女を^女
既^女て^女也^女戲^女て^女い^女号^女仙^女の^女多^女と^女ま^女月^女
ま^女の^女い^女して^女い^女西^女十^女四^女百^女韻^女れ^女色^女を^女海^女
爾^女來^女門^女葉^女ぬ^女と^女と^女も^女唯^女乙^女州^女
よ^女の^女も^女投^女え^女と^女む^女乙^女初^女と^女群^女等^女
と^女昔^女の^女せ^女さ^女る^女こ^女こ^女と^女た^女を^女も^女今^女般^女

梓^女の^女ち^女り^女と^女く^女と^女世^女傳^女と^女唐^女の^女せん
と^女欲^女し^女て^女物^女す^女や^女と^女も^女傳^女の^女病^女
遇^女て^女息^女也^女暫^女念^女日^女と^女後^女水^女の^女等^女

江州大津松本之隠士觀桂堂

砂石子

宝永四丁亥年春乙州之因

懇求不得止深筆畢



笑之小文

風羅坊芭蕉

百骸九竅の中は物もかりなき針は
 針坊やうみ誠まうすもけか粉に破れ
 やすしんもさうもあやもこれね
 白と好も久し強き生涯れもら
 しくなすある時を憐て放擲せん
 りとあひある時をすすて人よ



如^女いせむいせむがらうとそは袖中^三はた
しめえは、ぬよ身安く次志はあはれ
男よまじいひよぬくともあはれぬよ
さくられ暫く思ふて思ふと嘆くよあはれ
さもさくろおよ破られ流かよ無能な
藤よあはれ只けし一筋よ程遠家西の
の和舟よあはれさあ紙のまよあはれ
雲舟の傍よあはれ利休の事あはれ

其費たす物そ一ちの志も風雅
よあはれもは造化よ志こひく四時よ
あはれすらんをむあはれあはれ
あはれあはれ月夜あはれあはれ
縁をよあはれあはれ妻秋よひと
あはれあはれ時をよ秋よ歎す妻秋
よあはれ秋よ離れて造化よ志こひ
造化よくあはれあはれ

計は月れ物なを定むかのまづりて
ありては此部流り来なきに
諸人とあふよけれん物一れ
又山とあむと名くしと
思城乃任名をさすとの批脇を
付て其角をうよおの国送りとな
りてなす

附てあよりのとこりん流り

け句をき流沾公より下り流りて勢
作りをさすとくたむむの物やうて田
友親疎門人味あるハ詩の文とまを
とく流の或ハ茶麩の粉を包み
志と見すあは三月乃糧と集り
カと入守紙布綿ふなまの
憎み志とくあは色のくは送り
つとひてあふあはをまをりてな

ふんしあるい小船とて別野を
海へけし多庵子酒肴拵り
て那湯と祝しふおとけみちや
ささくえ懸ある人の首途する
まも船なりや中相りくく
飛れりれ

柗道の日記中りかきの紀氏
長明阿佛の危き文とゆふ人情

と重しそら餘を皆付似よ
ひま其糟粕と改家りあこす
海へて淡智短牙此筆よ及く
もあすすそ日を海際居そら
晴てそら松さかこよ何と云川
流れたりなこりあそれもよ
くえんゆれも昔そあ蘇新此
こらひあすそらゆたのれ

はれもいさよあはれはあふみ
山鼓がまうのくもまはれも且ち
こまの程もあはれ雲のほり
こまのいさよあはれあはれ
やせんやと書集のくもはれ
者れはあはれいさよあはれ人の
護言すこまのいさよあはれ人
又七絶せし

心あよとありて

甲斐乃園とんたや

形を舟雅きんた世のあはれ
あはれてあはれ遠くあはれ
あはれあはれあはれあはれ
あはれあはれあはれあはれ
あはれあはれあはれあはれ
あはれあはれあはれあはれ

あはれあはれあはれあはれ

三川の國保良をせりし事よはた
志のつてしるるるよと
あつては人清長一と
松さよは二十五里尋せり
吉田よは

そはれ二人は松を

あま付徳と田の中よ細あり
て海らら

みの日あるよは

保良村らり伊古流を里は
あつては地は
伊古流と海
いふやうなる方
くまの西は撰入ら
甚るるを指す
名貴心と云は

有れ海のそとへゆく海女のそとへ
浪のそとへゆく海女のそとへ
うりうりもをちりてはあはれ
なるお姫

藤二つ足舟えれりて海

藤田御供養

應永と守鏡も清くもつね

蓮た乃人よむむるこゝろ

きんぐりて体急すは

兼根とす人よむるは

みづ人の言

たつひはあつたふまは

さしやちやんをりて

あつたふまは

あつたふまは

けりて大坂波早れ

三編のひまのりくがねあふら^九お
かすくぬいふ及

師老十のねふいふおのむ白里
ふ入んとす

藤原のくみやうまの
藤原の

春あふらりくくまあれんと云
日おのりまよりりくく杖つき坂
よるのりお能くらちりりくく

おのり

おのりくくくくくくくくく

おのりくくくくくくくくく
あふらりくくす

白里お藤のねふいふくくく

宵れくくくくくくくくく
酒のくおぬくくくくくくく
くくくくくくくくくくく

初春

まきまきまきまきまきの野の

植まきややくけりまの一二す

伊賀乃國所彼の庄とらふ事後
系上人の四徳の儀津山新大徳
とまきまきまきまき千歳れ形を
かりてぬ藍ハ破れて礎とまき
坊舎まきまき田畑とまきの形り

まよ乃も像ハ若れ縁壇を所へ
の〜現前と、まよのれまきまき
の山形ハまきまきまきまき
其代乃まきまきまきまき
射くるれまきまきまきまき
草蔭の上まきまき双林の植まき
松まきのまきまきまきまき

まよまきまきまきまきまき

はあしめいあつめいあつめい

伊勢守回

何乃本れ也いあつめいあつめい

裸もたもいあつめいあつめい

美提山

けい乃かほいあつめいあつめい

龍尚舎

物のうもいあつめいあつめい

細代民歌をうたふ舎

梅のあつめいあつめい

あつめい舎

いあつめいあつめい

神垣のうらに梅いあつめいあつめい

あつめいあつめいあつめいあつめい

あつめいあつめいあつめいあつめい

あつめいあつめいあつめいあつめい

よきことなり

法華の心はしるすは妙なる也

神妙なることありて

法華の心はしるすは妙なる也
の心はしるすは妙なる也
よきことなり
法華の心はしるすは妙なる也
の心はしるすは妙なる也
よきことなり

法華の心はしるすは妙なる也
の心はしるすは妙なる也
よきことなり
法華の心はしるすは妙なる也
の心はしるすは妙なる也
よきことなり

乾坤無任同行二人

よきことなり

法華の心はしるすは妙なる也

嶽の奥多ふさひたつらうたうらと
皆松捨たれも松の幹よいあみこま
つ金銀やうの物尻等かゝ茶室は皆
なんのあまもく塔の背負ふて
いふすまゝいゝかないゝあはれ
よひつらうらうらうらうらうら
あつたつたつたつたつたつた

あつたつたつたつたつたつた

初歌

去のあやうき人ほりて偶

足跡く借りやうらむの雨 下菊

首唄山

ねみきりむらり林の歌

三編 多武峯

脛峠 多武峯ヨリ
龍門越たし

雲雀より穴子やうらうらうら

龍門

龍門のやとくは産よしん
酒のこまはらんかは飲のち

西河

かろくや山吹らるる飲のち

蜻蛉の飲

布海の飲は布海のこまらるる二十
山の奥さく

はなまの川さき

布海ちわの飲

善面の飲

雉尾古へ柳らるる

榎

榎のりこまらるるや日くは里さ里

日とせよきあそびやあそび

扇と酒のこまらるる榎

若清水

春海のこまらるるは清水の

文

十五

よりのいかに川を流るるに
のしるしをたゞしきるに
あつたはなほいふに
くあつたはなほいふに
あつたはなほいふに
あつたはなほいふに
あつたはなほいふに
あつたはなほいふに
あつたはなほいふに
あつたはなほいふに

あつたはなほいふに
あつたはなほいふに
あつたはなほいふに
あつたはなほいふに

あつたはなほいふに

あつたはなほいふに

あつたはなほいふに

あつたはなほいふに

あつたはなほいふに

あつたはなほいふに

あ

あ

跪ちやせめて西のよみへ〜
の原〜とせりくしむるもい
まき〜
侯の良系よ遠化の切とらんある
そ後の初若の然とよむひ情の人
乃實とさう〜
ねひち〜
や〜寛歩あるはく

井〜
を想ひ出さ〜
あひ能る者か〜
よう〜
りひちり〜
あひむ〜
也合〜
う〜

乃人もさき去のたはれなかりありあひ
ともふむらうれらちよめん出し
あてはるのうちに玉を指ひ流すよ
金を均ららん地してあよもす書付
人よもかたらんやかりあそみは
のひとけちりし

夜更

一つぬいて後よ負ぬ夜こく

音形出て布子書しに云く 万菊

薩佛の日記をたあはらむあまがして
訪はらふ麻のふと書しよんてはら
おのへちうしうれん

薩仏の日記よまめあふ麻のふ

招提寺鑑真和尚末朝の日記
中七十卷をれ難と志のふりぬ
四月乃らうら場風吹入らぬ終りぬ

百二の芳名をいふは縁をね

美草のふれは常の如く

四なるよき良きなり

藤の角は人二節のうらみ

大坂のあつ人のいふ

杜の枝はも 藤のひは

次

月をねねの海をいふは

月をねねの海をいふは

卯月中はの光も縁をいふ

見しつた月もいふは

わが世もいふは

けしきもいふは

いふは

いふは

いふは

二十
羊腸險阻たる根よりのわね
よしのあな(いしあな)のしんぞう
はく根はくしんぞうのしんぞう
しんぞうのしんぞうのしんぞう
しんぞうのしんぞうのしんぞう
しんぞうのしんぞうのしんぞう
しんぞうのしんぞうのしんぞう

ほくはくしんぞうのしんぞう
しんぞうのしんぞうのしんぞう

明石夜泊

蜻蛉やんぞうのしんぞうの月
かたのしんぞうのしんぞうのしんぞう
しんぞうのしんぞうのしんぞう
しんぞうのしんぞうのしんぞう
しんぞうのしんぞうのしんぞう

そ家^女の近の地もよむらぬ地ら
佐美^女の近の地もよむらぬ地ら
の地もよむらぬ地ら
か家もよむらぬ地ら
と海^女の境もよむらぬ地ら
又後の言はよむらぬ地ら
う家もよむらぬ地ら
はよむらぬ地ら

のこ^女の地もよむらぬ地ら
おて^女の地もよむらぬ地ら
や^女の地もよむらぬ地ら
い^女の地もよむらぬ地ら
侍^女の地もよむらぬ地ら
と^女の地もよむらぬ地ら
船^女の地もよむらぬ地ら
由^女の地もよむらぬ地ら

は烟をたてあつておぼろに
あなをかんよらうとて
供所をたておぼろに
櫛目をかきとてあまの物
ありてはくちまのあま
はりのまをたてあつて
おぼろにたてあつて

菰名古屋に滞留の时有
更科記行幸而爰に次

はりてあつておぼろに
あなをかんよらうとて
供所をたておぼろに
櫛目をかきとてあまの物
ありてはくちまのあま
はりのまをたてあつて
おぼろにたてあつて

Handwritten musical notation on the right page, consisting of a single staff with notes and rests.

Handwritten musical notation on the left page, consisting of a single staff with notes and rests.

☆

114

此の如く書きたるは、
一、二、三、四、五、六、七、八、九、十、
十一、十二、十三、十四、十五、十六、十七、十八、十九、二十、
二十一、二十二、二十三、二十四、二十五、二十六、二十七、二十八、二十九、三十、
三十一、三十二、三十三、三十四、三十五、三十六、三十七、三十八、三十九、四十、
四十一、四十二、四十三、四十四、四十五、四十六、四十七、四十八、四十九、五十、
五十一、五十二、五十三、五十四、五十五、五十六、五十七、五十八、五十九、六十、
六十一、六十二、六十三、六十四、六十五、六十六、六十七、六十八、六十九、七十、
七十一、七十二、七十三、七十四、七十五、七十六、七十七、七十八、七十九、八十、
八十一、八十二、八十三、八十四、八十五、八十六、八十七、八十八、八十九、九十、
九十一、九十二、九十三、九十四、九十五、九十六、九十七、九十八、九十九、百、
百一、百二、百三、百四、百五、百六、百七、百八、百九、百十、
百一十、百一十

此の如く書きたるは、
一、二、三、四、五、六、七、八、九、十、
十一、十二、十三、十四、十五、十六、十七、十八、十九、二十、
二十一、二十二、二十三、二十四、二十五、二十六、二十七、二十八、二十九、三十、
三十一、三十二、三十三、三十四、三十五、三十六、三十七、三十八、三十九、四十、
四十一、四十二、四十三、四十四、四十五、四十六、四十七、四十八、四十九、五十、
五十一、五十二、五十三、五十四、五十五、五十六、五十七、五十八、五十九、六十、
六十一、六十二、六十三、六十四、六十五、六十六、六十七、六十八、六十九、七十、
七十一、七十二、七十三、七十四、七十五、七十六、七十七、七十八、七十九、八十、
八十一、八十二、八十三、八十四、八十五、八十六、八十七、八十八、八十九、九十、
九十一、九十二、九十三、九十四、九十五、九十六、九十七、九十八、九十九、百、
百一、百二、百三、百四、百五、百六、百七、百八、百九、百十、
百一十、百一十

月新也 四ノ百家のみし

吹きすすふいあしよのあし

此記行終つ後し州以謂行終之文
之終及之馬ノ賦集ノハ淺き
以惜之集と加しと加し人企ぬ

江南枕々菴し列梓之

宝永六年孟春慶且

京寺町二條上町

書林

井筒屋庄兵衛
同 宇兵衛板

